D 88

在宅老人とホーム老人のＩＡＤＬ、趣味等に関する研究（第１報）

― 生活の規定要因と生活動作能力に与える影響について ―

○和洋女子大（非常勤）佐久間　淳・同短大被服　力丸テル子

［研究の目的］　わが国における急速な人口高齢化に際し、老人の地域保健福祉対策の資料に供するため、65歳以上の在宅老人とホーム老人について、ＡＤＬ（日常生活動作能力）とＩＡＤＬ（手段的生活動作能力）、趣味と生活形態などを調べた知見を、第１報として報告したい。

［対象と方法］　対象は首都圏の①過疎地、②都市部における在宅老人70名、③某市立養護老人ホーム老人50名とした。この内②と③で調査の満たされた在宅者53名（男13、女40、平均76.8歳）、ホーム老人27名（男 6、女21、平均76.4歳）を用い因子分析などを行った。調査は②について某女子大学生を指導して行い、③は報告者らが行った。内容はＩＡＤＬの指標による13問と趣味や関心に関する35問、計48問であった。なお、期間は1988年から１年間とした。

［結果と考察］　②と③群には年齢の有意な差が認められず、ＡＤＬにもχ^2検定で有意差は認められなかった。

ところがＩＡＤＬでは、手段的自立に関する５項目の平均が、②在宅群の80.8％に対して③ホーム群が57.1％と低値であった。さらに全指標とも③群が低値であるが、とりわけ「自分で食事の用意ができる」が48.1％で、②群の77.4％に比べて有意に低かった。次に知的能動性に関しては、４項目の平均が79.7％に比べて47.2％で一層大きな差が見られた。とくに「年金などの書類が書ける」および「新聞を読む」が②群のほぼ80％に対して37％と有意に低かった。また社会的役割に関する４項目の平均が82％対52％であり、ことに「家族や友人の相談にのる」が83％対37％と大差を示した。しかし因子構造には大差がない。そして趣味にも屋外型と屋内型の差が見られるなど、老人の置かれた状況による生活の規定性が注目される。

［まとめ］　以上のごとくホーム老人は、食事を自分で作る必要がなく、家族などと疎遠がちで、外出や趣味が制約され、生活意欲やＩＡＤＬの低下を招きやすい面が認められる。